

## 茶道と音楽と

東京音楽大学大学院二年（東京都）

## 神足 有紀

四年前の初釜、先生のお宅は着物をお召しになった社中の生徒さんで華やかに賑わっていました。私にとっては初めての初釜です。

一歩茶室に入ればそこは日常の喧騒から切り離された異空間です。新春の設えがなされた床の間には「松樹千年碧」と書かれた掛け軸。松の樹はいつも変わらず緑だけけれど、春には新しい芽を吹き、古い枝は枯れて散っていく、日々新たななるものがあってこそ、常に変わらない姿を保つものの価値がある、そんな意味だろうか。正座して目の前で繰り広げられる静かなお点前を見ながらあれこれと考えます。お花は、今まさに開かんとする瞬間を切り取ったかのような寒椿と黄梅。茶室が少しずつ温まってゆくにつれてかすかに花弁が開くように、時間はゆっくり流れます。拝見した香炉には「聴松風」と書かれています。松の木の震える音を聴きなさい、つまり心の耳で静寂を聴きなさい、

という意味なのでしょう。炭が勢いよくパチパチと燃える音がします。「ご名炭ね」の声に炭手前をした方が嬉しそうです。障子からは柔らかい冬の陽射しが茶室を包み、炭の中のお香がかぐわしく匂い立ちます。花びら餅の白味噌あんこと甘い牛蒡を口に含み、お濃茶のまったりした甘さが喉元を通り過ぎると、掌には「鶴亀」という名のお茶碗の温もり。私の中で眠っていた五感が一気に目覚めフル稼働を始めました。

社中には、八十歳を優に超える大先輩が三人いらっしやいます。いつも私のお点前が始まると、時折うとうととしていたお疲れモードから一転、シャキッと注意してくださる方。お洒落でどこか可愛らしく、亡くなった祖母のようです。初期の認知症を患い、何度も同じことを繰り返しておしゃべりになるけれど、社中一の炭手前名人として君臨する方。亡くなった祖父が認知症だったので、この方が一日でも長くお稽古に通えたらいいな、と見守りたい気持ちです。そして水屋の師匠と呼ばれ裏の仕事を丁寧に教えて下さる方。お三方とも長時間の正座をもとめせずそれぞれ別の人生を反映したお点前をなさいます。一年に一度皆さんが集まる初釜に出席してよかったな、と思えた社中最新少の一日でした。

しかしそれからというもの、私の大学生活は教育実習、大学院入試や卒業試験準備などでどんどん忙しくなってい

きます。お茶室に座っていても、何かいらいらしていたり焦っている私は、人のお点前を落ち着いた気持ちで見ることが出来ません。心ここにあらずの私のお点前はきつと先生に見抜かれていたと思います。わかっているも自らの心を整える余裕がないのです。「忙中閑あり」という言葉の意味を自分の中に見つけることができず、次第にお稽古への足は遠のき、私の中の茶道は小さくなっていききました。

そして昨年、大学院生としての始まりと同時に新型コロナウイルスの感染拡大です。私の専攻は音楽学部音楽です。卒業演奏会も中止になり、声を張り上げる音楽はなによりも忌み嫌われる学科となりました。マスク越しに歌う寂しさ、一般の音楽愛好者に合唱を教えたいという望みも消えました。ようやく授業が再開したもののリモートによるオンライン授業で、唯一対面によるレッスンもアクリル板越しのマスク歌唱でした。コロナ禍においては、足りないものを数えるのではなく、あるものでできる可能性を探そう、というテーマが私の目標になりました。

そんな時、茶道の先生からお稽古再開の嬉しいご連絡をいただきました。茶室に入る人数を制限してマスク着用、お濃茶は各服点、様々な新しいルールの中とはいえ、久しぶりのお稽古はとても心安らぐものでした。残念なことに私の尊敬するお三方は外出を控えており、いまだお目にかかれておりませんが。

ただ私の中の茶道はこの再開で少し変化しました。人のお点前を見ると、どうしてこんなにも所作に違いがあるのかと興味津々です。十人十色、三者三様とはよく言ったもので、茶筌通しひとつとっても、そこにはその人が凝縮されているのです。これは私が専攻する音楽でも同様です。奏でる音楽はその人そのもの。技巧を超えたところに存在する何か目に見えないものが聴く人の琴線に触れるのです。そこには隠せない怖さも潜んでいます。

また茶道には実に合理的な型があります。私が学ぶ音楽にも型があります。「型を会得したところからいかに自由になれるかが大事だ」と邦楽奏者や能や歌舞伎の演者たちが語るのをよく耳にします。じっくりと型を身につけいつの日か自分らしさをお点前でも演奏でも表現できたらいいな、と考えるようになりました。

あの日の初釜のような賑やかさは、いつどんな風に戻ってくるのか楽しみにしたいと思っています。